

## 論文

# 翻訳者コンピテンスの涵養を目的とする翻訳教育カリキュラムの開発に向けたレビュー

—「わかること」を介した「できること」の移転に向けて—

朴惠<sup>†</sup> 影浦峽<sup>†</sup>

<sup>†</sup> 東京大学大学院教育学研究科

本論文では、実務翻訳の現状を考慮した教育カリキュラムの開発に向け、前提となる概念と状況の整理を、主に文献と事例のレビューを通して行う。具体的には、「翻訳では、どのような場面で翻訳者にどのようなものが求められるか」という、翻訳教育における根本的な問いに答えるために、まず、実務翻訳におけるコアプロセスを整理する。次に、それを含むより一般的な翻訳論で扱うコアプロセスは翻訳研究においてどのように議論されてきたかを確認する。それを踏み台にしつつ最後に、翻訳教育のカリキュラムがどのように生まれ、そこでは翻訳者コンピテンスの涵養がどのように捉えられてきたかを、二つの大学院コースの事例を取り上げて検討する。

キーワード：翻訳プロセス、翻訳者コンピテンス、カリキュラム開発

## 目次

- 1 はじめに
- 2 実務翻訳における翻訳ワークフローとコアプロセス
  - 2.1 ISO 17100:2015 の位置づけ
  - 2.2 翻訳ワークフローとコアプロセス
- 3 翻訳論におけるコアプロセスに関する議論
- 4 大学院レベルの翻訳教育の現状
  - 4.1 大学院レベルの翻訳教育の位置づけ
  - 4.2 中国 MTI と北京大学の日本語翻訳修士課程
  - 4.3 欧州 EMT とリーズ大学の応用翻訳研究修士課程
  - 4.4 MTI と EMT における翻訳者コンピテンスの涵養
- 5 おわりに

## 1 はじめに

社会情勢の移り変わりと科学技術の展開により、近年、翻訳、とりわけその大部分を占めるいわゆる産業翻訳には大きな変化が起きており、それに対応して、翻訳者に求められるものすなわち翻訳者コンピテンスの範囲も変容してきている。

翻訳の変化としては、大きく三点を挙げる事ができる。第一に、基本的な作業プロセスが変わっている。産業翻訳では、複数人が一つの翻訳業務に参加するプロジェクト型の翻訳が主流となっている。プロジェクト・マネージャあるいはコーディネータがクライアントの要求を汲み取り、複数の翻訳者が同時進行で作業してもばらつきのない訳文<sup>1</sup>が生成できるよう、仕様を定め、用語集やスタイルガイドを準備する。翻訳者は自身の担当部分がプロジェクトに統合されることを念頭に置きながら作業する。訳文の完成までに、翻訳者とチェック、プロジェクト・マネージャとの間で、複数回の意見交換がなされることが標準的である。

第二に、使用するツールや技術が発展した。プロジェクト型翻訳作業を可能にするのは翻訳支援 (CAT: computer-assisted translation) ツールである。翻訳メモリの作成と更新、用語集の参照、プロ

プロジェクトの進捗確認などは、CAT ツールを介して容易かつ統合的にできるようになっている。多くの CAT ツールは機械翻訳 (MT: machine translation) に対応している。MT の結果を実務翻訳の品質水準からどう見極めるか、技術とツールを翻訳プロセスにどう組み入れるかは、翻訳者にとって新たな課題であるだけでなく、翻訳とはそもそも何かをめぐる理論的な問いを改めて提起している。

第三に、業務範囲が拡大した。近年、一つの言語から別の言語に忠実に転換するというオーソドックスな翻訳業務のほか、製品やサービスを特定の地域に適応させるためのローカライゼーション (localization; L10N, 地域化) や、商品名や広告のようなクリエイティブなものを他の言語や文化に適合させるトランスクリエーション (transcreation) などの言語業務に対する需要も高まっている。これらは、翻訳とは異なる作業であるということもできるが、こうした作業に求められるコンピテンスと翻訳者に求められるコンピテンスには共通する部分も多く、作業プロセスも似ており、こうした業務に翻訳者が従事することも多い。

翻訳教育においても、こうした変化に対応した教育を行う必要が認識されている。翻訳教育の現状を見ると、こうした変化への対応を取り入れたコースもあれば、十分に対応していないコースもある。いずれにせよ、これからも起きうる変容に対しても能動的に対応できる教育を設計するならば、今一度、翻訳教育の原点ともいえる「翻訳では、どのような場面で翻訳者にどのようなものが求められるか」という問いに回答の見通しを与えることが重要である。本論文では主な関連文献の検討を通して、第 2 節で実務翻訳における翻訳ワークフローとコアプロセスを整理し、第 3 節でそれを含むより一般的な翻訳論で扱うコアプロセスが翻訳研究においてどのように議論されてきたかを確認する。それを踏み台にしつつ、第 4 節で、翻訳教育ではカリキュラムはどのように生まれ、翻訳者コンピテンスはどのように捉えられてきたかを、実際の大学院コース 2 例の検討を通して明らかにする。コアプロセスを重視するのは、理論的には翻訳が翻訳であるための核を認識することが重要であるためであり、教育の観点からは環境の変化に対応して翻訳教育コースに導入される事項の位置づけを検討するための参照点となるためで

ある。また、後述する翻訳者コンピテンスの中核である「翻訳コンピテンス」の具体性は、それが関与するコアプロセスがどのようなものであるかの具体的な認識を前提とするものであることにも関連する。

## 2 実務翻訳における翻訳ワークフローとコアプロセス

訳文の実現に関係するプロセスまたはその一部のことを翻訳ワークフローと呼ぶ<sup>2</sup>。本節では、翻訳サービスの国際規格である ISO 17100:2015<sup>3</sup> において翻訳ワークフローがどのように規定され、その中で翻訳者が主に関わる部分 (コアプロセス) がどのようなものかを整理する。

### 2.1 ISO 17100:2015 の位置づけ

本論文で ISO 17100:2015 を基本的な翻訳サービスの枠組みとして扱う理由は、成立の経緯と位置づけにある。1990 年代、翻訳需要の高まりに応じて翻訳業界が発展する中で、一貫した品質の保証が必要であるとの認識が強くなり、翻訳品質基準を確立する動きが欧州各地で広がった。1996 年にイタリアで発行された UNI 10547 は、欧州で初めて翻訳サービスと通訳サービスに関する品質基準を定めたものである。UNI 10547 では、サービスの計画と契約の準備、サービスの実行、サービスの監視と管理という 3 つのフェーズから、翻訳通訳会社に対してサービスの要件を定義している。この区分は ISO 17100:2015 にも受け継がれた。UNI 10547 には、翻訳サービスに関して現在の理解と異なるところもある。例えば、バイリンガルチェック、すなわち原文言語コンテンツに照らして訳文言語コンテンツが合意した目的に対して適切であることを確認する編集作業は、ISO 17100:2015 では専門的なバイリンガルチェック担当者の仕事とされるが、UNI 10547 ではプロジェクト・マネージャの仕事とされている<sup>4</sup>。

1998 年に発行されたドイツの DIN 2345 は、翻訳サービスのみを対象とする。翻訳会社に加え、フリーランス翻訳者や一般会社内の翻訳部門などにも適用され、契約や作業手順も重視している<sup>56</sup>。DIN 2345 は米国や中国などにも大きな影響を与えた。2006 年に制定された米国国家規格 ASTM F2575-06 は DIN 2345 に基づいて作成されたものである<sup>7</sup>。2003 年、中国が初めて翻訳サービスに

関する国家規格 GB/T 19363.1—2003 を制定した際にも、DIN 2345 を参照していた<sup>8</sup>。

1999年、欧州翻訳企業連合協会 (EUATC: European Union of Associations of Translation Companies) は、こうした国家規格のほか、オランダの ATA Taalmerk なども参照しつつ、欧州レベルで初めての翻訳品質基準である、“翻訳企業のための EUATC 品質基準 (EUATC Quality Standard for Translation Companies)” を制定した<sup>9</sup>。その後、EUATC は欧州標準化委員会 (CEN: European Committee for Standardization) と協力して、この規格を欧州規格にするために改正し EN 15038:2006 を発行した<sup>10</sup>。2015年、EN 15038:2006 を中心的な参照規格とした国際規格である ISO 17100:2015 が発行され、EN 15038:2006 はその施行に伴い廃止された。ちなみに、2021年3月、日本は ISO 17100:2015 およびその修正案<sup>12</sup>を基に、産業規格 JIS Y 17100:2021<sup>13</sup> を制定している。本論文で、ISO 17100:2015 の記載を引用して使用する際の日本語訳の一部は JIS Y 17100:2021 を参照にしている。

ISO 17100:2015 は、それまでに発行された複数の国家規格や国際規格を基に制定されたものであり、現在世界で最も広く利用されている翻訳に関する規格として、翻訳プロセスを考えるために標準的な参照点となっている。また、ガイドライン規格ではなく認証規格であり、翻訳産業への影響力は大きい。いわゆる産業翻訳が翻訳産業の大部分を占めることを踏まえると、ISO 17100:2015 の枠組みのもとでコアプロセスを考えることは、翻訳教育にとって必須の前提である。

## 2.2 翻訳ワークフローとコアプロセス

ISO 17100:2015 の冒頭には下記の記載がある。

この規格は、翻訳サービスの品質および引渡しに直接影響を及ぼす翻訳プロセスのあらゆる側面に対する要求事項を規定する。この規格には、品質の高い翻訳サービスの引渡しに必要な、コアプロセスの管理、資格に関する最低限の要求事項、資源の可用性および管理、並びにその他の処置について、翻訳サービス提供者 (TSP) を対象とする規定内容を記載している<sup>14</sup>。

ここでの翻訳サービス提供者 (TSP: Translation

Service Providers) は、専門的な翻訳サービスを提供する言語サービス提供者 (LSP: Language Service Providers) のことで、翻訳会社、個人翻訳者または社内翻訳部門を含む<sup>15</sup>。ISO 17100:2015 で規定された翻訳ワークフロー<sup>16</sup> は、(1) 制作前のプロセスおよび活動、(2) 制作プロセス、(3) 制作後のプロセスという3つの部分に分けられ、それらを通してプロジェクト管理、システムおよびその保守が行われる必要があるとされている。(1) 制作前のプロセスおよび活動に関しては、具体的に (a) 引合いおよび実施可能性、(b) 見積り (別途合意がある場合を除く)、(c) クライアントと TSP 間の合意、(d) プロジェクト関連のクライアント情報の取扱い、(e) プロジェクトの準備が挙げられている。(3) 制作後のプロセスには、フィードバックと終了管理が含まれる。

ISO 17100:2015 で規定された翻訳ワークフローの中で、最も中核的である (2) 制作プロセスに関しては、作業項目および項目ごとの担当を図1に整理して示す。翻訳から最終検品および引渡しまでが順番に行われ、誤りが見つかるたびに翻訳に戻る。各項目のうち、「モノリンガルチェック」および「プルーフリード」は必須ではない。

図1では担当の記述を機能的な観点からの分類で行っているため、翻訳者が関与するのは「翻訳」および「翻訳者チェック」に限られると理解される恐れがあるが、ここでの翻訳者は翻訳および翻訳者チェックを担うものという意味であり、いわゆる翻訳の専門的コンピテンスを持つ専門家としての翻訳者は、「バイリンガルチェック」も担当することになる。ISO 17100:2015 ではバイリンガルチェック担当者の専門的コンピテンス<sup>17</sup>に関して、次の記載がある。

TSP は、バイリンガルチェック担当者が 3.1.3 に規定されている翻訳者の全てのコンピテンス、3.1.4 に規定されている翻訳者の資格、並びに対象分野の翻訳および/またはバイリンガルチェックの経験を備えていることを保証しなければならない<sup>18</sup>。

これに対して、モノリンガルチェック担当者の専門的コンピテンスは下記のように記述されている。

TSP は、モノリンガルチェック担当者が

| 作業         | 定義   | 担当者           |
|------------|--|---------------|
| 翻訳         | 原文言語コンテンツを記述形式で訳文言語コンテンツに変換する一連のプロセス               | 翻訳者           |
| 翻訳者チェック    | 翻訳者が実施する、訳文言語コンテンツの検査                              | 翻訳者           |
| バイリンガルチェック | 原文言語コンテンツに照らして訳文言語コンテンツが合意した目的に対して適切であることを確認する編集作業 | バイリンガルチェック担当者 |
| モノリンガルチェック | 訳文言語コンテンツが合意した目的に対して適切であることを確認する編集作業               | モノリンガルチェック担当者 |
| プルーフリード    | 納品前に、バイリンガルチェック済みの訳文言語コンテンツを検査し、修正を適用すること          | プルーフリード担当者    |
| 最終検品及び引渡し  | 仕様が満たされていることを最終的に確認すること及び引渡し                       | プロジェクトマネージャー  |

図 1: 翻訳ワークフローにおける制作プロセスとその担当者  
(ISO 17100:2015<sup>3</sup>, JIS Y 17100:2021<sup>13</sup> を基に作成)

対象分野の専門家であり、高等教育機関から得た当該分野関係の資格および／または当該分野の経験を備えていることを保証しなければならない<sup>19</sup>。

これらの記述から、バイリンガルチェック担当者は、対象分野の翻訳および／あるいはバイリンガルチェックの経験を備えている翻訳者であることがわかる。一方、モノリンガルチェック担当者に対しては特に翻訳に関するコンピテンスや資格、経験は求められていない。

以上から、「翻訳では、どのような場面で翻訳者にどのようなものが求められるか」という問いの「場面」に対して、「翻訳者が求められるのは、主に翻訳、翻訳者チェック、バイリンガルチェックという3つの場面である」との回答が与えられることになる。対応して、翻訳教育カリキュラムの開発においても、翻訳ワークフローの「翻訳」「翻訳者チェック」および「バイリンガルチェック」の場面で進められるプロセスをコアなプロセスと考えることが妥当である。近年、翻訳者コンピテンスのカテゴリは広がりを見せているが<sup>20</sup>、その中でやはりコアとなるのはこの部分であり、また、コンピテンス涵養の促進という課題が重要なものと

してあるのもこの部分である。基本的に、伝統的に「翻訳」と捉えられてきた部分と重なるが、プロジェクトを前提とした枠組みのもとで、翻訳、翻訳者チェック、バイリンガルチェックが明示的に分けられている点は注目に値する。

一方、これらの場面で「翻訳者にどのようなものが求められるか」については、ISO 17100:2015は、大きく6つのコンピテンスを挙げている。すなわち、(a) 翻訳コンピテンス、(b) 起点言語と目標言語における言語とテキストに関するコンピテンス、(c) 調査、情報の収集と処理に関するコンピテンス、(d) 文化に関するコンピテンス、(e) 技術に関するコンピテンス、(f) 分野に関するコンピテンス、である<sup>21</sup>。ISO 17100:2015にはこれらについて説明が付与されているが、それでも、特にコンピテンスの一つとして「翻訳コンピテンス」が立てられている点は循環論的であるし、またそれは他に対して中核的なものであるが、それにも拘わらず、あるいはそれ故に、その説明は「目的や目標言語の慣例、プロジェクトの仕様等に従って、分野やクライアントの用語等の基準、正確さ、適切な文法や正書法、語彙の一貫性、スタイルガイドの規程、妥当なロケール、適切なフォーマット

ト、想定される読者への対応を維持しながら『コンテンツを翻訳する能力』であり、言語コンテンツ理解と制作の問題に対処する能力、仕様や要求に応じて目標言語コンテンツに変換する能力を含む<sup>22</sup>とある程度であり、あまり具体的ではない。

### 3 翻訳論におけるコアプロセスに関する議論

第2節では主に翻訳規格に基づき、実務翻訳におけるコアプロセスを整理してきた。本節では、これまで整理したものを含むより一般的な翻訳論で扱うコアプロセスについて、翻訳研究ではどのような議論がなされてきたかを、分析の概念や仕組みを重視しながら整理する。

翻訳はどうあるべきか。よい翻訳とは何かという問いをめぐっては、古今東西、数多くの実務家や研究者が様々な議論を重ねてきた。20世紀以前において、直訳あるいは逐語訳 (literal translation/word-for-word translation) と意識あるいは自由訳、意味対応訳 (free translation/sense-for-sense translation) の対立が長期にわたり大きな関心を集めていたが、結論は出ないままであった<sup>23 24 25 26</sup>。

20世紀半ばから、この、結論が出ない論争を避け、より体系的な議論を展開しようとする研究者たちが、翻訳を、主として言語学的プロセスと捉え、言語学の理論を用いて翻訳を説明するという言語学的アプローチを試みた<sup>27 28</sup>。原文と訳文の関係を「等価 (equivalence)」という概念によって説明するのはそうした流れを代表するものである。

等価に関する数多くの議論の中で、最も著名なのは、Nida<sup>29</sup>の「形式的等価 (formal equivalence)」と「動的等価 (dynamic equivalence)」であろう。前者は可能な限り目標言語テキストが含む情報を起点言語テキストが含む情報と一致させ、起点言語テキストの形式 (例えば構文とイディオム) と内容 (例えば主題とコンセプト) を再現することに重点を置く。完全に包括的なテキストを得るためには多数の脚注を使用することも厭わない。対照的に、後者は「効果的等価 (equivalent effect)」の原則のもと、読みやすさを重視する。目標言語の慣例に従って自然な表現を用い、目標言語テキストの読者と目標言語テキストに含む情報との関係と、起点言語テキストの読者と起点言語テキストに含む情報との関係の一致<sup>30</sup>を目指す。

Reiss<sup>31</sup>は等価の概念を踏まえた上で、翻訳をコミュニケーション行為として捉え、翻訳者が翻訳する際に選択する方略はテキストタイプにより決められると主張する。また、翻訳を適切に批評するには、翻訳者が翻訳しているテキスト (すなわち起点言語テキスト) の種類を認識しなければならないのと同じように、批評家もその種類について明確でなければならず、かつ両者が同じテキストの分類基準を持つ必要があると指摘する。

そのため、Reiss<sup>32</sup>はKarl Bühler<sup>33</sup>の言語三機能、すなわち叙述、表出、呼びかけ (訴え、働きかけとも) を援用し、起点言語テキストを、情報型、表現型、効力型の3つに分け、それぞれに対応する翻訳時の注意点や評価基準などを展開した。具体的には、(a) 情報型テキスト (参考書、報告書など) では起点言語テキストの概念的な内容への直接的かつ完全なアクセスを保証できている場合に、(b) 表現型テキスト (詩、演劇など) では概念的な内容の芸術形式の直接的な印象を伝えることができている場合に、そして (c) 効力型テキスト (選挙演説、広告など) では望ましい反応を直接引き出すテキスト形式を作成できている場合に、その翻訳は成功であると評価できるとする<sup>34</sup>。

Vermeer<sup>35</sup>は、翻訳は、単に意味の転換ではなく、翻訳者が受信者として起点言語テキストをどのように解釈するか、また翻訳者が翻訳する際に目標言語テキストの機能をどのように選択するかが重要であり、空間的または時間的距離から起点言語テキストと目標言語テキストの間に文化的距離が生まれる場合、機能の変化は不可欠であると指摘している。翻訳行為はその目的により決められると主張するこの理論は、ギリシア語で目的や意図を意味する「スコpos」を使用し「スコpos理論」と命名されている<sup>36</sup>。スコpos理論によると、与えられた翻訳概要の要件を満たす限り、どのような翻訳方略を使用しても適切であることになる<sup>37</sup>。

テキストタイプ別翻訳理論とスコpos理論が代表する、翻訳をコミュニケーション行為として捉え、文脈における機能の観点から意味を理解するというアプローチは、一般に、機能主義的アプローチと呼ばれる。スコpos次第でどのような翻訳方略を使用しても適切であるため、機能主義的アプローチでは、直訳か意識かという長年の論争は妥

当性を失うことになる<sup>38</sup>。

この、機能主義的アプローチは、実務翻訳における実践と比較的親和性が高く、実務翻訳で行われている実践に理論的な認識を与えたものと解釈することができ、翻訳教育において比較的よく取り上げられる翻訳理論である。実際、テキストタイプの認識と、コミュニケーションにおける目的の同定は、前節末尾で見た ISO 17100:2015 の「翻訳コンピテンス」において遵守されるべき基準と、部分的にはあるが対応している。言語的あるいは言語学的なレベルではなく文書の社会的位置づけを考慮しているという点で、より翻訳実務において関与する認識に対応したものとなっているのである。これらから、実践の規範と理論の両面で、翻訳のコアプロセスについて、それを構成する場面の整理が進み、またコアプロセスに関与する要因の明確化も進んできたことが確認できる。一方、理論研究はやはり抽象的な点が多く、教育現場でコンピテンス涵養に適用するにはさらなる解像度が必要である。

#### 4 大学院レベルの翻訳教育の現状

第2節と第3節では、翻訳者が実務翻訳で主どのようなプロセスでどのようなものが求められるか、そのプロセスについて翻訳論でどのような蓄積があったかを確認した。本節では、翻訳教育ではカリキュラムはどのように生まれ、翻訳者コンピテンスはどのように捉えられてきたかを、国家レベルで新しく翻訳教育を充実させようとしている中国と、翻訳教育の歴史が長く、欧州における翻訳学修士要件の共通枠組みを踏まえた英国の事例を通して明らかにする。

##### 4.1 大学院レベルの翻訳教育の位置づけ

翻訳者の養成は伝統的に、独学あるいはいわゆる徒弟制度的なプロセスによりなされてきたが、1930年、モスクワ国立言語大学 (Moscow State Linguistic University) の前身となるモスクワ近代言語研究所 (Moscow Institute for Modern Languages) の設立を皮切りに、高等教育機関が翻訳教育を担うようになり、教育プロセスが制度化され始めた<sup>39</sup><sup>40</sup>。1964年、翻訳者、通訳者を養成する大学や専門学校の国際常設会議 (CIUTI: Conférence Internationale Permanente d'Instituts Universitaires de Traducteurs et Interprètes<sup>41</sup>) が発足し、以降、翻

訳教育は外国語学習や異文化研究から独立し、独自の発展を遂げてきた<sup>42</sup><sup>43</sup>。

現在では、欧州各国、米国、中国、韓国、オーストラリアなどを含め、世界の比較的多くの地域で大学院レベルでのコースが翻訳教育の基本的な枠組みとなっている<sup>44</sup><sup>45</sup><sup>46</sup><sup>47</sup><sup>48</sup><sup>49</sup>。

その背後には、2つの理由がある。一つは翻訳学習には前提があることである。少なくとも2つの言語を高度に操ることができることはすべての翻訳教育コースの入学条件の基本とされている。例えば、欧州翻訳修士 (EMT: European Master's in Translation) の場合、入学時に CEFR C1 レベル またそれ以上に相当する言語能力が必要である<sup>50</sup>。従って、大学の四年間で外国語を習得してから大学院で翻訳の勉強を始めることが必然となる。この点は、次のようなかたちで確認されている。

結局のところ、学生が起点言語を正確に読み、目標言語を有効に書き、不足する情報を適切に調べることができるまで、翻訳教育を実際に始めることはできない<sup>51</sup>。

もう一つは、翻訳産業の世界的な発展である。巨視的に見ると、翻訳の中心として認識されてきたものは、宗教的著作や文芸作品から、政治社会経済面での国際化といわゆる産業翻訳のニーズの急速な発展に伴い、法的文書や契約書、特許、技術マニュアル、商品の説明書等に移行してきた。翻訳の需要としては後者が圧倒的に多い。そのため、何らかの専門分野の学士号 (例えば経済、法律、工学など) または外国語とのダブルディグリーを取得した上で、大学院で専門的な翻訳訓練を受けることが翻訳者になるための理想的な教育バックグラウンドとされている。

##### 4.2 中国 MTI と北京大学の日本語翻訳修士課程

2007年、翻訳修士課程 (MTI: Master of Translation and Interpreting) が中国大陸で発足し、大学で、翻訳か通訳、対象言語、専門分野などによって英中翻訳<sup>52</sup>、日中通訳、国際会議通訳、文学翻訳などの大学院レベルの通訳または翻訳教育専門コースを開設することが可能となった。現在、中国大陸では300以上の大学で翻訳修士課程が設置されている<sup>53</sup>。

表1は、中国全国翻訳専門学位修士教育指導委員会が発行した“翻訳修士専門学位大学院生教育

指導的養成方案”<sup>54</sup>（以下，“養成方案”）で示したカリキュラム指針である。

“養成方案”によると、翻訳修士課程カリキュラムには必修 20 単位と選択 18 単位以上を合わせて 38 単位以上の科目が組み込まなければならない。また、各大学は専攻の養成目標および各自の特色に応じて、特色ある科目を設け選択必修とすることができる。

ここで、具体的なカリキュラムを理解するために、2007 年に中国國務院学位委員会によって承認された最初 15 の MTI 試行校の 1 つである北京大学の例をみてみよう<sup>55</sup>。発足当初、北京大学 MTI は英中翻訳コースのみであったが、2012 年に日中翻訳コースと日中通訳コースが新設され、現在の年間募集人数は、概ね、英中翻訳コース 30 名、日中翻訳コース 10 名、日中通訳コース 20 名となっている。

表 2 に、2012 年度日中翻訳コースカリキュラム<sup>56</sup>を示す。2 年制のこのコースを卒業するには、学生は表 2 にある必修科目 21 単位、選択必修科目から 10 単位、選択科目から 6 単位、総計 37 単位以上を取得しなければいけない。北京大学では通常、50 分の授業時間を 1 課時と呼び、週に 1 課時の授業を 1 学期（14 週間の講義期間に加え 2 週間の試験期間がある）にわたり履修すると 1 単位が取得できるため、日中翻訳コースを卒業するには、実習や卒業論文などと別に、授業出席とテスト参加だけでおよそ 493.3 時間が必要となる。

選択科目に関しては表 2 で示した日本語系で開講される言語文化類科目のほか、教員に事前許可が必要ではあるが、表 3 で列挙した英中翻訳コースを含む MTI センター全体や他の学部学科で開講される科目の履修も可能である。これは北京大学 MTI の特色の一つである。北京大学の翻訳関連課程は、外国語学院 (School of Foreign Languages) で開設されている MTI のほかに、ソフトウェア&マイクロエレクトロニクス学院 (School of Software & Microelectronics) で開設されているコンピュータ技術修士課程コンピュータ支援翻訳コース (CAT: Computer Aided Translation) がある。両学院は翻訳テクノロジーの教育を巡り連携を取り、MTI センターは後者所属の教員を招いて授業を開講するのみでなく、学生に CAT 修士課程の授業を履修する機会も設けている<sup>57</sup>。また、外国語に特化

した単科大学と異なり、総合大学である北京大学の学生は意欲さえあればいつでも他分野のトップレベルの授業を受けることができる。これは何かしらの専門分野知識が必要とされる翻訳者の養成には特に重要である。

#### 4.3 欧州 EMT とリーズ大学の応用翻訳研究修士課程

欧州翻訳修士 EMT は、欧州委員会と翻訳関連の修士課程を提供する高等教育機関とのパートナーシッププロジェクトであり、欧州委員会の翻訳総局 (DGT: Directorate-General for Translation) は合意された専門的な基準と市場の要求を満たす翻訳学修士課程に EMT の品質ラベルを授与する<sup>58</sup>。2009 年には、EMT ネットワーク初めての会議が開催されるなど、共通の教育を模索する動きは強い<sup>59</sup>。

しかしながら、国家レベルで設置を推進している中国 MTI と異なり、欧州 EMT はカリキュラム指針がない。その代わりに、発足当初から翻訳者コンピテンスを非常に重視し<sup>60</sup>、教育コースが EMT で定義したコンピテンスフレームワーク<sup>61</sup>（以下、EMT 2017）をどの程度網羅したかを主な基準に、5 年毎に審査を行い品質ラベルを授与する<sup>62</sup>。現在、25 カ国 80 以上の大学で EMT の基準に沿った翻訳関連の修士課程を提供している<sup>63</sup>。

英国の大学は EU 脱退により EMT メンバー校ではなくなったが、その基準に沿った翻訳修士課程を提供している大学は現在も 14 校ある<sup>64</sup>。その 1 つはリーズ大学である。リーズ大学は前述した翻訳者、通訳者を養成する大学や専門学校の国際常設会議 CIUTI の 5 つある英国メンバー校の 1 つでもあり、英国において翻訳教育に定評がある。

リーズ大学翻訳研究センターの応用翻訳研究修士課程 (MA in Applied Translation Studies) は EMT の品質ラベルを授与されている<sup>65</sup>。この課程は、伝統的な翻訳に加えて、コンピュータ支援翻訳やプロジェクト管理も重点しており、在学中にプロの現場で使用されるローライゼーション、プロジェクト管理、用語管理ツールを実際に体験できる。学生は英語と下記言語のうち最大 3 言語の翻訳を専攻とすることができる：アラビア語、中国語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、ポルトガル語、ロシア語またはスペイン語から英語へ、英語からアラビア語または中国語へ。

表 1: 中国 MTI カリキュラム指針  
 (“養成方案”<sup>54</sup> を基に作成)

| カテゴリ   |                 | 科目           | 単位          |   |
|--------|-----------------|--------------|-------------|---|
| 必修科目   | 公共必修科目          | 政治理論         | 3           |   |
|        |                 | 中国言語文化       | 3           |   |
|        | 専門必修科目          | 翻訳概論         | 2           |   |
|        |                 | 翻訳理論と技巧      | 2           |   |
|        |                 | 通訳理論と技巧      | 2           |   |
|        | 専攻必修科目          | 実用翻訳         | 4           |   |
|        |                 | 文学翻訳         | 4           |   |
| 選択必修科目 | 総合類             | 第二外国語        | 2           |   |
|        |                 | 中外翻訳簡史       | 2           |   |
|        |                 | 翻訳批評と鑑賞      | 2           |   |
|        |                 | 異文化コミュニケーション | 2           |   |
|        |                 | 中外言語対比       | 2           |   |
|        |                 | コンピュータ支援翻訳   | 2           |   |
|        |                 | など           |             |   |
|        |                 | 翻訳類          | テクニカルライティング | 2 |
|        |                 |              | 科学技術翻訳      | 2 |
|        |                 |              | 国際会議翻訳      | 2 |
|        |                 |              | ビジネス翻訳      | 2 |
|        |                 |              | 法律法規翻訳      | 2 |
|        | 放送翻訳            |              | 2           |   |
|        | 中国古典対外翻訳        |              | 2           |   |
|        | 翻訳ワークショップ       | 2            |             |   |
|        | 翻訳とローカライゼーション管理 | 2            |             |   |
|        | など              |              |             |   |

フルタイムで一年間、パートタイムで二年間で修了でき、卒業するには180単位以上を取得しなければいけない<sup>66</sup>。リーズ大学では、学生独自の学習時間、自主的なオンライン学習時間、講義などで教員と一緒に過ごす時間などを合わせて科目に費やした時間の総計は、100時間をもって10単位とする<sup>67</sup>。従って、卒業するには最低1800時間が必要である。

表4は、リーズ大学2022年度モジュールとプログラムカタログ<sup>68</sup>での掲載内容を基に作成したカリキュラム一覧である。一列目の「選択科目A」「選択科目B」「選択科目C」は履修制度を説明するため、筆者が振り当てたもので、選択科目Aは学位論文や実習プロジェクトに関連する科目、選

択科目Bは言語に特化した科目、選択科目Cは専門分野に関連する科目である。学生は、必修科目のすべて、選択科目Aから30単位、選択科目Bから翻訳レベルチェックに合格した、同じ言語対と方向のものを30単位、残された科目Bと選択科目Cから45単位を履修しなければいけない。

カリキュラム構成から言えるのは、リーズ大学の応用翻訳研究修士課程は言語関連の科目が充実しており、学生が選ばれる言語対が豊富な点である。また、コンピュータ支援翻訳、ローカライゼーションとプロジェクト管理を必修科目にされているほど、産業翻訳の需要を非常に重視している。これは、EMTの第一義的な目的である若手翻訳学習者の就業促進<sup>69</sup>とも一致している。

表 2: 2012 年度北京大学 MTI 日中翻訳コースカリキュラム  
 (“翻訳コース大学院生養成方案”<sup>56</sup> を基に作成)

| カテゴリ      | 科目            | 単位 |
|-----------|---------------|----|
| 全学共通必修科目  | 政治理論          | 3  |
| 必修科目      | 日中翻訳理論と技巧     | 2  |
|           | 中日翻訳理論と技巧     | 2  |
|           | 語彙と翻訳         | 2  |
|           | 実用文翻訳         | 2  |
|           | 日中翻訳ケーススタディ   | 2  |
|           | 中日翻訳ケーススタディ   | 2  |
|           | 翻訳テキスト分析      | 2  |
|           | 文体と翻訳         | 2  |
|           | 文学翻訳          | 2  |
| 選択必修科目    | 上級ニュース翻訳      | 2  |
|           | 中日言語比較と翻訳     | 2  |
|           | 上級ビジネス日本語     | 2  |
|           | 翻訳理論と実践       | 2  |
|           | 中日文化コンテキストと翻訳 | 2  |
|           | 時事翻訳          | 2  |
| 言語文化類選択科目 | 第二外国語（英語）     | 2  |
|           | 上級放送翻訳（一）     | 2  |
|           | 上級放送翻訳（二）     | 2  |
|           | 翻訳専門家指導       | 2  |
|           | 日本語通論         | 2  |
|           | 日本近現代文学史      | 2  |
|           | 日本思想文化概論      | 2  |

一方、北京大学とリーズ大学のカリキュラム 2 例に共通しているのは、分野知識や CAT ツールなど翻訳の周辺について何を学ぶかは範囲として確実にカバーできていることである。しかしながら、コアとなる翻訳の部分は結局、実習を通じた移転あるいは個々の教員に依存している恐れがある。

#### 4.4 MTI と EMT における翻訳者コンピテンスの涵養

中国 MTI は上述した科目構成という意味での狭義のカリキュラム指針と別に、より広義のカリキュラム、すなわち、翻訳修士号を取得するために (1) 備えるべき基本素養、(2) 身につけるべき基本知識、(3) 受けるべき実践トレーニング、(4) 備えるべき基本能力、および提出する (5) 学位論

文の基本要求を規定する“学位基本要”<sup>70</sup>も制定している。そのうち、とりわけ翻訳者コンピテンスと関連しているのは (2) 身につけるべき基本知識と (4) 備えるべき基本能力である。

Piao et al.<sup>71</sup> は ISO 17100:2015 と EMT 2017 で挙げられた翻訳者コンピテンスカテゴリの対応関係を整理している。それを踏まえ、さらに中国 MTI のこの、身につけるべき基本知識と備えるべき基本能力の内訳を加えたものを図 2 で示す。

図 2 から、ISO 17100:2015、EMT 2017、MTI 学位基本要で述べた、翻訳者コンピテンスと言えるもので内包しているものは、範囲としてほぼ一致していることがわかる。しかし、これらのコンピテンス枠組みとカリキュラムとの関係には、不明確なところが多い。具体的に、上記で確認し

表 3: 2012 年度北京大学日本語 MTI 翻訳コースカリキュラムその他  
 (“翻訳コース大学院生養成方案”<sup>56</sup> を基に作成)

| カテゴリ                       | 科目  | 開講所属     |
|----------------------------|---|----------|
| 翻訳テクノロジーと言語<br>サービスプロジェクト類 | 翻訳業界研究 I                                  | MTI センター |
|                            | 翻訳業界研究 II                                 |          |
|                            | 翻訳テクノロジー実践                                |          |
|                            | コンピュータサイエンステクノロジー基礎                       |          |
|                            | コンピュータ支援翻訳テクノロジー基礎                        |          |
|                            | バイリンガル編集と情報出版の新技术<br>ローカライゼーションと国際化プロジェクト |          |
| 時事と社会科学類                   | 文化心理学特別研究                                 | 心理学系     |
|                            | 中国文化と美学特別研究                               | 中国言語文学系  |
|                            | 西洋美学特別研究                                  | 哲学系      |
|                            | 比較政治と比較文化                                 | 国際関係学院   |
|                            | 国連と国際機関                                   | 国際関係学院   |
|                            | 言語と文化                                     | 社会学系     |
| 法学商学類                      | 国際貿易                                      | 光華管理学院   |
|                            | 管理学                                       | 光華管理学院   |
|                            | 国際法基礎理論                                   | 法学院      |

た北京大学とリーズ大学のカリキュラム 2 例から、どの科目が実際にどのコンピテンスの涵養にどのように資するかは、現在の公開情報に基づく範囲では、十分な解像度で検討することができない。第一著者の経験も踏まえてこの状況を考えるならば、これは必ずしも、それぞれの大学で、コンピテンスの項目とカリキュラムとの明示的な対応があるにもかかわらず、本論文で用いた情報が公開情報であるために踏み込めないというばかりではないと思われる。むしろ、目標とされるコンピテン스가、カリキュラムレベルでどのように扱われるべきか、翻訳のような実践的かつ人間の思考に近い領域では、対象化された知識でカバーする部分と、実践を通して身に付ける部分との明確な分配が未だできていないことの反映であると考えられる。このことは、第 2 節・第 3 節で検討した、翻訳のコアプロセスに関する我々の認識の現状からも、窺うことができる。

## 5 おわりに

本論文では、主要な関連文献のレビューと翻訳教育コースのカリキュラム事例の検討を通して、

実務翻訳の現状を考慮した教育カリキュラムの開発に向け、前提となる概念と状況の整理を行った。

具体的に、第 1 節では、翻訳業界の変容を概観した上で、能動的に対応できる教育を設計するためには、「翻訳では、どのような場面で翻訳者にどのようなものが求められるか」という、翻訳教育の原点を改めて問う必要があることについて問題を提起した。

第 2 節では、翻訳の国際規格 ISO 17100:2015 に基づいて実務翻訳における翻訳ワークフローとコアプロセスを整理し、前述した問いの前半「どのような場面で翻訳者が求められるか」に対して、「翻訳者が求められるのは、主に翻訳、翻訳者チェック、バイリンガルチェックという 3 つの場面である」との回答を与えた。また、問いの後半である「翻訳者にどのようなものが求められるか」、すなわち翻訳者コンピテンスに対して、ISO 17100:2015 の記述は、翻訳の授業に適用するために必要な具体性が十分でないことを確認した。

第 3 節では、第 2 節で整理したコアプロセスを含むより一般的な翻訳論で扱うコアプロセスについて、翻訳研究ではどのような議論がなされて

| ISO 17100<br>プロに求められるコンピテンス        | EMT 2017<br>学習者が知っておくべきこと                   | MTI学位取得のために                         |                  |
|------------------------------------|---|-------------------------------------|------------------|
|                                    |   | 身につけるべき基本知識                         | 備えるべき基本能力        |
| (a) 翻訳コンピテンス                       | 翻訳<br>・戦略に関するコンピテンス<br>・方法論に関するコンピテンス       | (b) 翻訳に関する知識<br>(e) 翻訳理論と実践に関する知識   | (b) 翻訳に関する能力     |
| (b) 起点言語と目標言語における言語とテキストに関するコンピテンス |   | (a) 言語に関する知識                        | (a) 言語に関する能力     |
| (c) 調査、情報の収集と処理に関するコンピテンス          |   | /                                   |                  |
| (f) 分野に関するコンピテンス                   | 翻訳<br>・主題に関するコンピテンス                         | (c) 百科知識<br>(g) 翻訳内容に関連する専門分野に関する知識 | (d) 百科知識獲得に関する能力 |
| (d) 文化に関するコンピテンス                   | 言語と文化<br>・異文化と社会言語学に関する意識<br>・コミュニケーション・スキル | /                                   |                  |
| (e) 技術に関するコンピテンス                   | テクノロジー<br>・道具と応用                            | (d) 情報技術に関する知識                      |                  |
| /                                  |   | (f) 言語サービス産業に関する知識                  | (e) チームワークに関する能力 |

図 2: ISO, EMT, MTI のコンピテンス・カテゴリの対応関係  
(Piao et al.<sup>71</sup> と中国 MTI “学位基本要求”<sup>70</sup> を基に作成)

きたかを確認した。言語学的アプローチから機能主義的アプローチに至る議論を改めて整理することによって、翻訳のコアプロセスに関する要因がより一層明確になっていること、一方で理論は抽象的な点が多いことを確認した。

第4節では、第2節と第3節の検討を踏まえ、翻訳教育コースで実際にカリキュラムがどのように生まれ、翻訳者コンピテンスがどのように捉えられているのかについて、中国と英国の大学院コースを取り上げ、検討を行った。観察した二つのコースにはそれぞれ指針となるコンピテンス枠組みがあり、それに準拠するようカリキュラムを組んでいることになっているが、コンピテンスの涵養とカリキュラムの具体的な設計との関係は十分に明確になっていない面があることを指摘した。

翻訳産業がますます発展していく中で、一定の質を備えた翻訳者を多数養成することが重要になっている。そのためには、目標とするコンピテンスの涵養のために、知識を媒介としてできることを導く体系的かつ解像度の高いカリキュラムの開発が急務となっている。教育現場での具体的な方法に結びつけ、分析的検討を促進できるようなカリ

キュラムがあれば、各種リソースがそれほど豊富ではない教育コースにも学習効果が期待できる。本論文で整理したように、産業の基準、翻訳理論、翻訳教育コースそれぞれで、この方向に資する進展は見られるものの、翻訳のコアプロセスにおける作業ができるようになることに関する、わかっていることの解像度には改善の余地がある。今後、コアプロセスの具体的な分析を通して、コンピテンス記述の解像度をあげるとともに、解像度の高い記述に基づくコアプロセスの知識をどうコンピテンスの涵養に活用していくかを検討していきたい。知識と実践の関係については、別途実証実験を通して考えていきたい。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費（課題番号: 19H05660）の助成を受けている。

## Notes

- 1) 翻訳研究と翻訳に関する産業規格では扱う問題点や訳し方の違いで、「原文」を「起点言語テキスト (source language text)」または「起点言

- 語コンテンツ (source language content)」「原文言語コンテンツ (source language content)」など、「訳文」を「目標言語テキスト (target language text)」または「目標言語コンテンツ (target language content)」「訳文言語コンテンツ (target language content)」などと呼ぶことが多いため、以下、本論文では「原文」と「起点言語テキスト」「起点言語コンテンツ」「原文言語コンテンツ」、「訳文」と「目標言語テキスト」「目標言語コンテンツ」「訳文言語コンテンツ」を同義語として用いる。
- 2) International Organization for Standardization. *Translation services—Requirements for translation services* (ISO 17100:2015), p. 1.
  - 3) *Ibid.* p. i–19.
  - 4) Pastor, G. C. “Translation quality standards in Europe: An overview,” in Bermúdez, E. M. and Miyares, L. R. eds. *Linguistics in the twenty first century*. Cambridge Scholars Publishing, 2009, p. 48.
  - 5) *Ibid.* p. 49.
  - 6) Arevalillo Doval, J. J. “The EN-15038 European quality standard for translation services: What’s behind it,” *The Globalization Insider*, vol. 4. available from <https://www.translationdirectory.com/article472.htm> (accessed date: 2022-10-16)
  - 7) Gural, S. K., and Chemezov, Y. R. “Analysis of efficiency of translation quality assurance tools,” *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, vol. 154, 2014, p. 360–363.
  - 8) 中華人民共和国国家質量監督檢驗檢疫總局『翻譯服務規範第1部分：筆訳』(GB/T 19363.1—2003) p. I.
  - 9) Pastor, G. C., *op. cit.*, p. 51.
  - 10) *loc. cit.*
  - 11) Arevalillo Doval, J. J., *op. cit.*
  - 12) International Organization for Standardization. *Translation services—Requirements for translation services—Amendment 1* (ISO 17100:2015/Amd 1:2017).
  - 13) 日本規格協会『翻訳サービス—翻訳サービスの要求事項』(JIS Y 17100:2021).
  - 14) International Organization for Standardization, *op. cit.*, 2015, p. vi.
  - 15) *Ibid.* p. 4.
  - 16) *Ibid.* p. 12.
  - 17) JIS Y 17100:2021 ではコンピテンスを「力量」とされている。
  - 18) International Organization for Standardization, *op. cit.*, 2015, p. 6.
  - 19) *loc. cit.*
  - 20) Piao, H., Yamada, M. and Kageura, K. “Metalanguages in translator education,” in Miyata, R., Yamada, M. and Kageura, K. eds., *Metalanguages for dissecting translation processes: Theoretical development and practical applications*. Routledge, 2022, p. 38–48.
  - 21) International Organization for Standardization, *op. cit.*, 2015, p. 6.
  - 22) *loc. cit.*
  - 23) Cicero. *De inventione. De optimo genere oratorum. Topica. With an English translation by H.M. Hubbell*. William Heinemann Ltd., Harvard University Press, 1949.
  - 24) St. Jerome. *The satirical letters of St. Jerome: Translated into English and with an introduction by Paul Carroll*. Gateway Editions, 1956.
  - 25) Hung, E. and Pollard, D. “Chinese tradition,” in Baker, M. and Saldanha, G. eds. *Routledge encyclopedia of translation studies*. 2nd ed., Routledge, 2009, p. 369–378.
  - 26) Munday, J. *Introducing translation studies: Theories and applications*. 4th ed., Routledge, 2016, p. 29–57.
  - 27) Saldanha, G. “Linguistic approaches,” in Baker, M. and Saldanha, G. eds. *Routledge encyclopedia of translation studies*. 2nd ed., Routledge, 2009, p. 148–152.
  - 28) Munday, J., *op. cit.*, p. 58–85.
  - 29) Nida, E. A. *Toward a science of translating: With special reference to principles and pro-*

- cedures involved in Bible translating. Brill, 1964, p. 159–160.
- 30) 言い換えると、原文の読者と訳文の読者が得られる体験の一致である。
- 31) Reiss, K. *Translation criticism—The potentials and limitations: Categories and criteria for translation quality assessment*. tr. by Rhodes, E.F., Routledge, 2014, p. 15–47. (Original work published 1971)
- 32) *loc. cit.*
- 33) Bühler, K. *Theory of language: The representational function of language*. tr. by Goodwin, D.F., John Benjamins, 2011, p. 35. (Original work published 1934)
- 34) Reiss, K. “Text types, translation types and translation assessment,” in A. Chesterman, A. ed. *Readings in translation theory*. Oy Finn Lectura Ab, 1989, p. 109.
- 35) Reiss, K. and Vermeer, H. J. *Towards a general theory of translational action: Skopos theory explained*. tr. by Nord, C., Routledge, 2014, p. 53. (Original work published 1984)
- 36) *Ibid.* p. 85–86.
- 37) Nord, C. “Functionalism in translation studies,” in Millán, C. and Bartrina, F. eds., *The Routledge handbook of translation studies*. Routledge, 2013, p. 201–212.
- 38) Schäffner, C. “Functionalist approaches,” in Baker, M. and Saldanha, G. eds., *Routledge encyclopedia of translation studies*. 2nd ed., Routledge, 2009, p. 115–121.
- 39) Caminade, M. and Pym, A. “Translator-training institutions,” in Baker, M. ed., *Routledge encyclopedia of translation studies*. 1st ed., Routledge, 1998, p. 280–285.
- 40) Kelly, D. and Martin, A. “Training and education,” in Baker, M. and Saldanha, G. eds., *Routledge encyclopedia of translation studies*. 2nd ed., Routledge, 2009, p. 294–300.
- 41) 英訳は International Standing Conference of University Institutes of Translators and Interpreters です。
- 42) Caminade, M. and Pym, A., *op. cit.*, p. 280–285.
- 43) Conférence Internationale Permanente d’Instituts Universitaires de Traducteurs et Interprètes. *History*. available from <https://www.ciuti.org/about-us/history/> (accessed date: 2022-10-26)
- 44) Pym, A. “Training Translators,” in Malmkjær, K. and Windle, K. eds., *The Oxford handbook of translation studies*. Oxford University Press, 2011, p. 475–489.
- 45) European Master’s in Translation (EMT). *European Master’s in Translation (EMT) explained*. available from [https://ec.europa.eu/info/resources-partners/european-masters-translation-emt/european-masters-translation-emt-explained\\_en](https://ec.europa.eu/info/resources-partners/european-masters-translation-emt/european-masters-translation-emt-explained_en) (accessed date: 2022-10-29)
- 46) Middlebury Institute of International Studies at Monterey. *Master of Arts in Translation and Localization Management*. available from <https://www.middlebury.edu/institute/academics/degree-programs/translation-localization-management> (accessed date: 2022-10-28)
- 47) 平洪, 仲偉合, 許鈞, 何其シン, 趙軍峰, 黄友義, 穆雷 “翻訳修士専門学位基本要求” 〈全国専門学位修士教育指導委員会編『専門学位類別(領域)博士, 修士学位基本要求』高等教育出版社, 2015〉 p. 72–77.
- 48) Ewha Graduate School of Translation and Interpretation. *About EWHA GSTI*. available from <http://cms.ewha.ac.kr/user/indexSub.action?codyMenuSeq=2708114&siteId=gstieng&menuUIType=sub> (accessed date: 2022-10-28)
- 49) Monash University. *A6007 - Master of Interpreting and Translation Studies*. available from <https://handbook.monash.edu/current/courses/A6007> (accessed date: 2022-10-30)

- 50) European Master's in Translation Board. *European Master's in translation: Competence framework 2017*. p. 6.  
available from [https://ec.europa.eu/info/sites/info/files/emt\\_competence\\_fwk\\_2017\\_en\\_web.pdf](https://ec.europa.eu/info/sites/info/files/emt_competence_fwk_2017_en_web.pdf)  
(accessed date: 2022-9-25)
- 51) Rose, M. G. "Must translator training remain elitist?" in Krawutschke, P. W. ed., *Translator and interpreter training and foreign language pedagogy*. State University of New York at Binghamton, 1989, p. 18.
- 52) コース名にある言語の並び順は訳の方向性を意味するわけではなく、単に対象言語を指す。英中翻訳コースでは英語から中国語、中国語から英語の両方向の翻訳について学ぶ。
- 53) 全国翻訳専門学位修士教育指導委員会 “全国翻訳修士学位点名録” 入手先 URL: <https://cnti.gdufs.edu.cn/info/1017/1955.htm> (アクセス日: 2022-5-9)
- 54) 全国翻訳専門学位修士教育指導委員会 “翻訳修士専門学位大学院生教育指導的養成方案” 『MTI 工作通訊』 vol. 20, 2011, p. 56–57.
- 55) “翻訳修士専門学位試点院校名簿” 『中国翻訳』 vol. 32, no. 2, 2011, p. 33.
- 56) 北京大学外国語学院日本語系 “翻訳コース大学院生養成方案” 入手先 URL: <http://jp.sfl.pku.edu.cn/rymti/pyfa/228840.htm> (アクセス日: 2022-9-12)
- 57) 北京大学外国語学院 “北京大学 MTI 教育センター” 入手先 URL: <https://sfl.pku.edu.cn/xssz/54440.htm> (アクセス日: 2022-5-9)
- 58) European Master's in Translation (EMT). *op. cit.*
- 59) Pym, A. *European Master's in Translation—possible contribution from research*. in a panel discussion of European Masters in Translation Network 1st Meeting, 2009, p. 1.  
available from [https://usuaris.tinet.cat/apym/on-line/training/2009\\_EMT.pdf](https://usuaris.tinet.cat/apym/on-line/training/2009_EMT.pdf)  
(accessed date: 2022-10-29)
- 60) *loc. cit.*
- 61) European Master's in Translation Board, *op. cit.*, p. 1–12.
- 62) European Master's in Translation (EMT). *European Master's in Translation (EMT) membership criteria*.  
available from [https://ec.europa.eu/info/resources-partners/european-masters-translation-emt/emt-membership-criteria\\_en](https://ec.europa.eu/info/resources-partners/european-masters-translation-emt/emt-membership-criteria_en)  
(accessed date: 2022-10-29)
- 63) European Master's in Translation (EMT). *List of EMT members 2019–2024*.  
available from [https://ec.europa.eu/info/resources-partners/european-masters-translation-emt/list-emt-members-2019-2024\\_en](https://ec.europa.eu/info/resources-partners/european-masters-translation-emt/list-emt-members-2019-2024_en)  
(accessed date: 2022-10-28)
- 64) *loc. cit.*
- 65) *loc. cit.*
- 66) University of Leeds. *Applied Translation Studies MA*.  
available from <https://ahc.leeds.ac.uk/courses/8257/applied-translation-studies-ma>  
(accessed date: 2022-10-28)
- 67) Module and Programme Catalogue. *MODL5001M Methods and Approaches in Translation Studies*.  
available from <https://webprod3.leeds.ac.uk/catalogue/dynmodules.asp?Y=202223&F=P&M=MODL-5001M>  
(accessed date: 2022-10-28)
- 68) Module and Programme Catalogue. *MA Applied Translation Studies*.  
available from <https://webprod3.leeds.ac.uk/catalogue/dynprogrammes.asp?Y=202223&P=MA-ATS>  
(accessed date: 2022-10-28)
- 69) European Master's in Translation (EMT). *European Master's in Translation (EMT) explained*.  
available from <https://ec.europa.eu/info/resources-partners/european-masters->

translation-emt/european-masters-

translation-emt-explained\_en

(accessed date: 2022-10-29)

- 70) 平洪, 仲偉合, 許鈞, 何其シン, 趙軍峰, 黄友義, 穆雷, *op. cit.*, p. 73-77.
- 71) Piao, H., Yamada, M. and Kageura, K., *op. cit.*, p. 43.

表 4: 2022 年度リーズ大学応用翻訳研究修士課程カリキュラム  
(モジュールとプログラムカタログ<sup>67</sup> を基に作成)

| カテゴリ     | 科目                    | 単位 |
|----------|-----------------------|----|
| 必修科目     | 翻訳研究の方法とアプローチ         | 30 |
|          | コンピュータ支援翻訳入門          | 15 |
|          | コンピュータ支援翻訳上級          | 15 |
|          | ローカライゼーションとプロジェクト管理   | 15 |
| 選択科目 A   | 論文：翻訳研究               | 30 |
|          | 拡張翻訳                  | 30 |
| 選択科目 B   | 専門仏英翻訳 A              | 15 |
|          | 専門独英翻訳 A              | 15 |
|          | 専門伊英翻訳 A              | 15 |
|          | 専門葡英翻訳 A              | 15 |
|          | 専門露英翻訳 A              | 15 |
|          | 専門西英翻訳 A              | 15 |
|          | 専門ア英翻訳 A              | 15 |
|          | 専門中英翻訳 A              | 15 |
|          | 専門日英翻訳 A              | 15 |
|          | 専門英ア翻訳 A              | 15 |
|          | 専門英中翻訳 A              | 15 |
|          | 専門仏英翻訳 B              | 15 |
|          | 専門独英翻訳 B              | 15 |
|          | 専門伊英翻訳 B              | 15 |
|          | 専門葡英翻訳 B              | 15 |
|          | 専門露英翻訳 B              | 15 |
|          | 専門西英翻訳 B              | 15 |
|          | 専門ア英翻訳 B              | 15 |
|          | 専門中英翻訳 B              | 15 |
|          | 専門日英翻訳 B              | 15 |
| 専門英ア翻訳 B | 15                    |    |
| 専門英中翻訳 B | 15                    |    |
| 選択科目 C   | 国際機関翻訳（英ア）            | 15 |
|          | 翻訳者のためのコーパス言語学        | 15 |
|          | 翻訳者のための英語             | 15 |
|          | 異文化間ビジネス管理            | 15 |
|          | 通訳スキル入門               | 15 |
|          | 翻訳ジャンル                | 15 |
|          | 法律翻訳入門                | 15 |
|          | 国際機関：コンテキスト，理論と実践     | 15 |
|          | 文芸翻訳                  | 15 |
|          | 専門目的のための文章作成          | 15 |
|          | リスピーキング：レポーティングとライブ字幕 | 15 |
|          | 機械翻訳の原理と応用            | 15 |
|          | スクリーン翻訳入門             | 15 |

# **A review for the design of a translation education curriculum aiming at the development of translator competence**

—Towards transferring “knowing how” through “knowing that”—

Hui PIAO <sup>†</sup> Kyo KAGEURA <sup>††</sup>

<sup>†</sup> Graduate School of Education, the University of Tokyo

In this paper, we examine concepts related to translator competence that are relevant to modern commercial translation practices, as a step towards designing a translation education curriculum that reflects the requirements for translators in commercial translation. We first examine what constitutes the core process of translation to clarify what sort of competencies are required in what stage of translation. We then observe the development of relevant concepts in translation theory. After observing these, we examine actual curricula in translation education, picking up two cases, one from China and the other from the UK. Through these examinations, we will clarify the steps to be taken to design a curriculum that can use the knowledge of translation to develop translator competencies.

Keywords: Translation Process, Translator Competence, Curriculum Design